様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７９２

研究課題名（和文）ハンドボール競技におけるグループ戦術的能力の規定因子に関する検討

研究課題名（英文）A study on the specific factors of group tactical ability in Handball

研究代表者
栗山　雅倫（Kuriyama, Masamichi）

東海大学・体育学部・准教授

研究者番号：８０４０８００４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、球技における効果的な戦術学習に寄与することを目的として、ハンドボール競技を題材とした、グループ戦術的能力の規定因子とその評価について検討した。その規定因子の検討にあたっては、国内外のトップ指導者へのインタビュー調査を実施し、評価については競技者の実態調査を実施した。グループ戦術的能力の必要性は、国内外を問わず極めて重要視されていることが明らかとなった。そしてその規定因子は、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、戦術的理解力が大きく関与するということが示された。またこのことは、競技者間にも同様の認識がなされていることが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, in order to contribute to effective tactical learning in ball games, specific factors and their evaluation of group tactical ability with handball competition were examined. In examining the specific factors, interview surveys were conducted to the top coaches in Japan and overseas, surveys on the actual condition of the athlete were also conducted for the evaluation.
It became clear that the necessity of group tactical abilities is regarded as extremely important regardless of domestic and overseas. It was shown that the specific factors are greatly related to communication ability, presentation ability and tactical comprehension. This also revealed that similar awareness was made among athletes.

研究分野：コーチング学

キーワード：ハンドボール　グループ　戦術的能力　状況解決能力　指導者　戦術学習

１．研究開始当初の背景

競技スポーツのコーチングにおいて、競技力を客観的に評価することは、トレーニング手段を設定していく上で不可欠である。その競技力の決定因子としては、一般的なもの競技力評価指標とともに、戦術的な要素もあげられる。特に球技などの実際の競技場面では、さまざまな判断の要素を含む戦術的な行動を繰り返している。しかしながら、そのほとんどが主観的な評価にとどまっている。

前段階の研究として、ハンドボール競における、個人の戦術的能力について検討を行ったが、ハンドボール競技のような集団の球技種目においては、個人の試みだけでは解決に至らない状況が存在することが明らかになった。

そこで本研究では、ハンドボール競技における、グループの戦術的能力の規定因子について明らかにし、その妥当性を評価し、トレーナビリティにについて検討することが極めて重要であり、とりわけ球技種目の指導における喫緊の課題であるとの認識に立ち、研究を開始するに至った。

２．研究の目的

ハンドボール競技において、個人やグループ戦術的能力がパフォーマンスに大きな影響を及ぼすことは、一般的に認知されている。しかしながら、その戦術的能力に関する説明や評価の多くは、抽象的な表現に委ねられてきた。

独自の研究において、個人の戦術的能力の規定因子やその妥当性、またトレーナビリティについて明らかにしてきたが、ハンドボール競技を含む、集団球技種目に欠かせないと認識される、グループの戦術的能力についての客観的な考察は、依然として多く見ない。そこで本研究は、ハンドボール競技を題材として、グループの戦術的能力の規定因子を検討し、その妥当性を検討した上で、効果的な戦術学習に貢献することを目的とする。

３．研究の方法

本研究では、研究を大きく３段階に分けて行った。

一つ目の段階として、グループ戦術的能力の規定因子を調査することとした。調査の対象は、国内外のトップレベルのチームを指導するコーチとし、インタビュー形式で回答を得たのち、指導者間の共通認識や相違について比較検討した。

研究の第 2 段階では、トップレベルを指導するコーチより得られた回答をもとに導き出した、グループ戦術的能力の規定因子について、プレーヤーを対象とした実態調査を実施することとした。

第 3 段階では、ハンドボール競技に関するコーチングの研究の動向を調査し、必ずしも定量的に評価されるべきでない、戦術に関する能力に対するアプローチや、コーチングにおけるコツやカンに関する伝達の実態について調査することとした。なお、この第 3 段階の調査は、戦術的能力に関する研究を進行していく上で、必要性を認めたため、実施するに至った。

(1) グループ戦術的能力規定因子調査

グループ戦術的能力の規定因子を調査するために、国内外のトップレベルを指導する指導者にインタビュー調査を実施した。

国内のトップレベルの指導者は、国内におけるパフォーマンスレベルの最も高い、日本ハンドボールリーグの指導者を中心として、代表チーム各カテゴリーの指導経験を持つ指導者も対象とし、インタビュー調査を実施した。

国外のトップ指導者は、ハンドボール競技の発祥の地であり、国際トップレベルのリーグを擁する、デンマークのデンマークリーグ関係のコーチを対象として実施した。

インタビュー調査は、調査対象によってインタビュー内容に相違が生じないよう、事前に作成したインタビューフォームに基づいて行った。

また、インタビューにより、率直な回答が得られるよう、データの取り扱い等による、各指導者や、指導するチームへ悪影響を及ぼさない配慮を十分に施すことを説明した上で、インタビューを実施した。

(2) 規定因子の妥当性に関する調査

国内外のトップ指導者へのインタビュー調査により導き出された、グループ戦術的能力の規定因子について、その妥当性を検討した。

調査の方法は、指導者間に共通して見られる、グループ戦術的能力の規定因子を評価できるゲーム状況を切り出し、パフォーマンスレベルとの比較を行った。

調査の対象として、ハンドボールを専門とする、大学トップレベルのリーグに所属する選手とし、様々なパフォーマンスレベルの選手を無作為に抽出した。

また、ゲーム状況の切り出しでは検討できない項目に関しては、プレーヤーの意識調査を実施した。

(3) コーチング研究の動向に関する調査

本研究を進めていく上で、戦術的能力は、必ずしも定量的な評価においてのみなされるべきものではないことが明らかになってきた。

例えばコミュニケーション能力に関しては、連携する選手から感覚を引き出すことや、連携したい内容について説明する能力などが含まれるが、このような内容に関し、様々なレベルの選手が感じている内容を、できるだけ率直に引き出すことに努めた。

戦術学習に関連するコーチングに関しては、近年事例的な研究が散見されるようになり、戦術的能力の向上に向けたアプローチを確認する必要性を認め、調査を実施した。
調査の方法は、ハンドボール競技における文献を精査し、そのアプローチ方法等について、中心的に確認した。

４．研究成果

(1) グループ戦術的能力規定因子調査

ハンドボール競技における、グループ戦術的能力の規定因子は、個人戦術的能力の規定因子と比較して、トップレベルの指導者間の見解に、ばらつきが見られることが明らかになった。
各指導者があげた、主な規定因子は以下の通りであった。

- 2：2 を攻撃する能力
- 3：3 を攻撃する能力
- 4：4 を攻撃する能力
- 2：2 を連携して防御する能力
- ポストの動きに連動する能力
- ポジショニング
- 理解力
  - ハンドボール競技に関する理解力
  - 一般的な理解力
- コミュニケーション能力
- リーダーシップ

以上より、指導者へのインタビューにより導き出された、グループ戦術的能力の規定因子は、必ずしも定量的な評価を実践できるものだけではないことが結果として得られた。
とりわけ国外のトップレベルの指導に携わる指導者は、ゲーム状況の切り出しによる設定での評価についてはほとんど言及せず、コミュニケーション能力や理解力をより重要視していることが明らかになった。

(2) 規定因子の妥当性に関する調査

ゲーム状況の切り出しにより、グループ戦術的能力を比較した結果、総合的にパフォーマンス能力の高い競技者において、2：2、3：3、4：4 状況における状況解決能力が高いことが示された。
グループ戦術的能力の規定因子は、個人戦術的能力の規定因子と重なる点も見られたが、多くの指導者が、個人戦術的能力よりも、グループの戦術的能力の方が重要であるとの見解を示した。
先行研究において、個人戦術的能力の規定因子も、グループの戦術的能力に関連することが明らかになったが、チームスポーツであるがゆえに、チームの他のメンバーと連携する能力こそが、個人にしても、グループにしても重要であると認識されることが確認できた。
さらに、グループ戦術的能力においては、個人で解決できない状況の打開についても言及され、グループにおける連携があってこそ、解決できる状況の存在を認知し、その状況解決に向けて個人における理解力、あるいは理解の共有能力が欠かせないとの見解が示された。
また、パフォーマンスの変化を検討した結果、トレーニング群におけるパフォーマンスの改善が有意に見られたことから、グループ戦術的能力のトレーナビリティがあることが示唆された。図１に、3：3 状況における、トレーニング群と非トレーニング群のトレーニング前後の成功試技数の変化を示した。

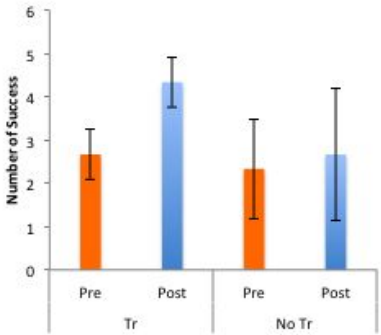

図１　3：3 状況における成功試技の変化

(3) コーチング研究の動向に関する調査

ハンドボール競技における、コーチング専門領域の文献調査を実施した。
ハンドボール競技に関する文献の割合は図 2 に示す通りであった。

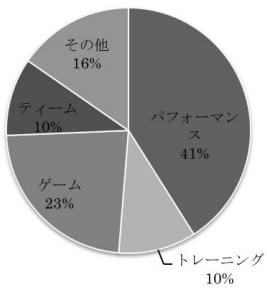

図 2　ハンドボールに関する論文の割合

また、近年の傾向として、コツやカンの伝達に関する文献等において、事例研究が散見されるようになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

① <u>栗山　雅倫</u>、コーチング学領域における研究アプローチの変化　-日本におけるハンドボール関連の研究を事例として、東海大学体育学部紀要、査読あり、第 46 号、2017、1-7

〔学会発表〕（計　1　件）

① 栗山　雅倫、田村　修治、藤本　元、横山　克人、ハンドボール競技における戦術的能力のトレーナビリティについて、日本体育学会第 65 回大会、2014

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
栗山　雅倫（KURIYAMA Masamichi）
東海大学・体育学部・准教授
研究者番号：80408004

(2)研究分担者
田村　修治（TAMURA Shuji）
東海大学・体育学部・教授
研究者番号： 30266449

藤井　壮浩（FUJII Masahiro）
東海大学・体育学部・准教授
研究者番号：20514920

陸川　章（RIKUKAWA Akira）
東海大学・体育学部・教授
研究者番号：70338739

藤本　元（FUJIMOTO Hajime）
筑波大学・体育系・助教
研究者番号：30454862

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

(4)研究協力者
（　　）